

ROSSI 四季報

RiTS

2001年9月

第14号

Research Organization of Social Sciences (立命館大学BKC社系研究機構)

CONTENTS

〈巻頭言〉

21世紀は新世紀か	中村 雅秀 ……1
知的財産権と ネットワークエコノミー	大川 隆夫 ……2
研究を通じた国際交流	大川 昌幸 ……3
経営の新展開を進める トヨタのフランス工場	兵藤 友博 ……4
利用者参画型マネジメントの可能性 —公共文化ホールの研究から—	近藤 宏一 ……5
前途洋々たるかな中国の中小企業	仲田 正機 ……6

大転換をとげた 日本の会計基準設定のしくみ	原 陽一 ……7
連結時代の企業財務分析の問題点 —財務指標の連続と断絶の研究—	松村 勝弘 ……8
国際シンポジウム：「確率過程論と 数理ファイナンス」について	赤堀 次郎 ……9
eラーニング/デジタル ・キャンパス/産学連携教育	奥村 陽一 ……10
確率過程と数理ファイナンス	渡辺 信三 ……11

巻頭言

立命館大学 社会システム研究所
所長 中村 雅秀

21世紀は新世紀か

21世紀は確かに新世紀である。しかし、世に言葉が氾濫するほど世紀的規模での展望が明示的に予測されているわけでもない。私たちの世代が生きてきた20世紀後半の50年間は、2度の世界大戦という世界史を除けば社会制度の上でも、科学技術の発展においても、グローバル化の進展においてもおそらく通常考えられている以上にはるかに激しい変動の時代だった。宇宙開発技術、コンピュータ技術の進歩とIT社会の出現、生命科学の信じられないほどの進展、体制的対立と憎悪の文化の生成と崩壊、目に見えない網の目のように世界中に張り巡らされた法的社会的関係の紐帯とボーダレス化の進展、それと国民国家の枠組み、伝統的文化との矛盾・衝突などなど。

こうした激しい変化の中で、そこから引き継ぎ、新しい社会規範として求められているもののうち重要に思われる事柄を幾つか論じてみよう。第一に、人間の生活や文化を豊かにするはずの技術の進歩が、逆に人間の心や文化を制覇し、文化規範・社会規範の急速な崩壊の原因にさえなっていることだ。この距離感を埋める社会変革こそ現代青年が次世代のリーダーとして必ず求められる課題なのではないか。新しい文学青年や哲学青年をどれだけ大学が輩出できるか、重要でかつもっとも困難な課題である。第二に、社会主義と資本主義の体制的対立の崩壊が「市場」という名の妖怪の勝利の宣言かのようにもてはやされることだ。無論、市場経済の発展が社会発展の重要なメルクマールのひとつであることは、いまだ貧困と構造的暴力にあえぐ途上国の現状をみるまでもない。しかし、「ひとり勝ち」にさえ見えるアメリカが今

日のように大国になった戦後史を裏付けたのは国際的「軍事力」と国内的「高速道路網」という大陸国家に特有な社会インフラ（公共財）を有したからに他ならない。今またそれは情報という名の公共財に及びつつある。ウォール街の論理はまた現代社会のほんの一部に過ぎない。現実には「混合経済」に拠らない国はないのであり、いかなる経済思想も現実の複合的経済社会に対してそれぞれの側面を強調する論理でしかない。政治家であれ経済思想家であれ新しい時代の器が必要としている新しい思想と理論を発見することが必要とされている。第三に、人々が気がつかない間に生活の隅々にまでグローバル化が進展し、世界はまるでひとつの国家に向けてひた走っているようだ。経済活動や科学技術の交流にとどまらず、人の移動やとりわけ情報の流通領域はとくにボーダレス、国際的諸機関、国際条約の網の目や政策的ハーモナイゼーション抜きには今日の社会は存立し得ない。ところが他方で、個別の国家、民族、文化、宗教等々、その進展と直接対立し衝突する現象が噴出している。「靖国問題」の歴史的精算もこうした現実を見据えてこそ重要なのだ。ブッシュ新政権発足後のアメリカの外交が多くの点でこうした世界史の流れに抗しているかに見える危険が歴史の具を繰り返すことにならなければよいが。国際的水準の指導者たることも、21世紀を生きる人々のミニマム・スタンダードに加えられなければならない。

(経営学部 教授)